



TITLE:

マルクス＝エンゲルスのブルジョ
ア民主主義革命理論(二) - マルクス
主義におけるブルジョア革命理論
の發展(一) -

AUTHOR(S):

堀江, 英一

CITATION:

堀江, 英一. マルクス＝エンゲルスのブルジョア民主主義革命理論(二) -
マルクス主義におけるブルジョア革命理論の發展(一) -. 經濟論叢 1955,
76(3): 148-162

ISSUE DATE:

1955-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/132439>

RIGHT:

經濟論叢

第七十六卷 第三號

日本國有鐵道における貨物等級指數……………佐 波 宣 平…(1)

マルクス＝エンゲルスの

ブルジョア革命理論(2)……………堀 江 英 一…(18)

保守的反獨占理論に對する小論……………吉 澤 榮 藏…(33)

イギリス革命年表 (翻譯) ……………A. E. コスミンスキー編…(1)
武 暢 夫譯

[昭和三十年九月]

京 都 大 學 經 濟 學 會

マルクス・エンゲルスのブルジョア民主主義革命理論(二)

——マルクス主義におけるブルジョア革命理論の發展(二)——

三 三月革命の經驗の整理

ヨーロッパの革命は事實上一八四九年なかばに終つた。二月革命は六月十三日山嶽黨のクーデターの失敗で、三月革命は七月二十三日のランニタットの陥落で、敗北に終つた。そして一八五一年十二月のルイ・ナポレオンのクーデターで、ヨーロッパはふたたび反動の支配にかえつていつた。

マルクスとエンゲルスは早速、つぎにきたるべき革命にそなえて、みずからが参加し指導した革命の經驗を整理し、そのなかから教訓をひきだそうとした。マルクス・エンゲルスはまず『共產主義者同盟への中央委員會の呼びかけ』第一回(一八五〇年三月。以下『共產主義者同盟への呼びかけ』とかく)を發し、マルクスはフランス革命の經驗を整理して『フランスにおける階級闘争』(一八五〇年)と『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』(一八五一—五二年)をかき、エンゲルスはドイツ革命を分擔して『ドイツ憲法戰役』(一八五〇年)・『革命と反革命』(一八五一

一五二年）さらに『ドイツ農民戦争』（一八五〇年）をかいだ。

一八五〇—五二年はマルクスとエンゲルスが最も多くの政治論文をかきかれらの政治理論を完成していつた時期であつて、そののちの經濟理論完成期と對照してマルクス主義確立の重要な時期を構成している。マルクス・エンゲルスのブルジョア革命理論もほぼこの時期に一應の完成をみるといつてさしつかえなからう。わたしは三月革命の経験がここどのようにに結實したかを、簡単に紹介しよう。

マルクス・エンゲルス『共產主義者同盟への呼びかけ』（一八五〇年三月）

『共產主義者同盟への呼びかけ』は、正確には、三月革命の経験の總括でなく、新しい革命への呼びかけであつた。マルクスとエンゲルスは一八五〇年なかばにいたるまで新しい革命の高揚期がちかづいてるとみていた（マルクス・エンゲルスは一八五〇年なかばにこの見解をすて、そのため共產主義者同盟はマルクス・エンゲルス多數派とウイリヒ・シャッパー少數派に分裂した）。そこで、マルクス・エンゲルスはこの新しい革命高揚期におけるプロレタリアートの戦術をあたえたが、そこには三月革命の経験がみごとに結實している。この『共產主義者同盟への呼びかけ』のなかでは、『共產黨宣言』のなかで暗示されたブルジョア革命のプロレタリア革命への發展轉化の理論が戦術にまでわたつてくわしく展開されている。この理論はここではじめてマルクス・エンゲルスによつて『永續革命』論となづけられている——プロレタリアートの「関の聲は、『永續革命』ということどなければならぬ」（この論文は國民文庫版『共產黨宣言・共產主義の原理』におさめられている。その一二〇頁、さらに一一〇頁参照）。

I 永續革命論

ドイツの小ブルジョアの民主黨は、都市のブルジョアの住民の大多數、小商工業者、手工業をふくんでいるばかりでなく、農民や、都市の獨立のプロレタリアートの援助をうるにいたつていない農村プロレタリアートをふくんで、はなはだ優勢である（前掲書一〇八頁）。しかも民主黨すなわち小ブルジョアの黨はますます組織されていつたのに、労働者黨はせいぜい地方的目的のために個々の地方に組織されるにとどまり、全般的な運動では完全に小ブルジョア民主主義者の支配と指導とをうけるにいたつている（前掲書一〇五頁）。しかし「ドイツの自由主義的ブルジョアたちが一八四八年に人民にたいして演じた役割、このきわめて裏切的な役割は、さしせまつた革命においては、今日、野黨として、一八四七年以前の自由主義的ブルジョアたちと同じ地位をしめている民主的小ブルジョアたちによつてひきつがれるであろう」（前掲書一〇七頁）。かれらはブルジョア革命で自分の目的をたつするとともに、プロレタリアートを弾壓するであろう。

それは歴史の必然である。「民主主義的小ブルジョアジーは、革命的プロレタリアのために全社會を變革しようなどとは毛頭考えず、現在の社會をできるだけ自分らにがまんのできる、そして快適なものにするような、そうした程度の社會狀態の變更をめざして努力する」——官僚の縮小による國費の節約・大地主とブルジョアジーとに主要な租税を轉嫁すること・大資本に對して小資本をまもるための官設信用機關と高利取締法・同じ目的のための相續權の制限・封建的大土地所有の一掃など、そしてそれらの目的のための「彼らとその盟友たる農民とを多數派にする民主的國家組織と、自治體財産および現在官僚によつて行使されている一連の機能にたいする直接の統制權を彼らの手にあたえる民主的自治體制度」（前掲書一〇九頁）。要するに「ドイツにおける共產黨の要求」が列舉したようなブルジョアの變革であつて、プロレタリアの變革ではありえない。小ブルジョアジーはブルジョアの變革にと

どまるが、プロレタリアートはブルジョアの變革を通じてプロレタリア的變革にまで前進しなければならない。マルクス・エングルスは書いている――

「小ブルジョアの民主黨にたいする革命的労働者黨の關係はこうだ、――すなわち、革命的労働者黨はその打倒をめざしている分派（絶對王政―筆者）に對抗して、この小ブルジョアの民主黨と提携するが、民主黨がそれによつて自分自身の利益になるように自分の地位をはかる問題では、ことごとくこの民主黨と對立するものである」（前掲書 〇八頁）。

『共產黨宣言』の「ドイツのブルジョア革命はプロレタリア革命の直接の序曲となるよりほかはない」（前掲書七四頁）という暗示的な永續革命論――『共產黨宣言』の構成からいえば、第四章のドイツのブルジョア革命における共產主義者の任務から第二章のプロレタリアートの終局任務への橋渡しの問題が、あたらしい客觀情勢のもとで眞正面から提出されている。それは小ブルジョアにたいするプロレタリアートの、そしてとくに「同盟の態度」の問題であつた。

Ⅱ 永續革命の戦術

マルクス・エングルスはブルジョア革命のプロレタリア革命への發展轉化というプロレタリアートの任務をブルジョア革命の三つの發展段階に應じて戰術的に規定している。

絶對王政支配段階

小ブルジョア民主主義者がプロレタリアートとおなじように壓迫されている絶對王政支配段階では、小ブルジョア民主主義者はプロレタリアートに提携と和解を申込み、プロレタリアートをかれらの民主黨のなかにとかしこもうとするが、プロレタリアートはこの提携をしりぞけなければならない。マルクス・エングルスはこの問題をつぎ

のように定式化している——

「労働者、とりわけ同盟は、公認の民主主義者とならんで、労働者黨の獨立の秘密組織と公然の組織とをつくりあげ、各班を、プロレタリアートの地位と利害とがブルジョアの諸影響をはなれて論議される労働者協會の中心および中核にするように、つとめなければならぬ」(前掲書一二頁)。

マルクス・エンゲルスは、小ブルジョア民主黨とは獨立の労働者協會をつくり、それを「獨立の秘密組織と公然の組織」とをもつ労働者黨の各班で指導すること、を指摘している。マルクスとエンゲルスとは三月革命もおわりにちかずいた一八四九年四月にすでにこの方針を聲明して、民主黨ライン州委員會を脱退した。『新ライン新聞』四月十五日にのつた『民主黨ライン州委員會脱退の聲明』はこう書いている——「民主黨の組織はあまりに多くの異質的分子を内部にふくんでいるので、主要な目的に有效な活動をなしえない、と吾々はみとめる。吾々はむしろ、同一の分子から成立している労働者協會のより緊密な連絡をまずえらばなければならない」(マルクス・エンゲルス選集第三卷五二八頁)と。革命の経験そのもののなから、プロレタリア黨の組織論がでてきたのである。

註 林健太郎氏の論文『三月革命と社會主義』(西洋史學Ⅹ)は、つぎの誤りをおかしている。第一に、マルクスとエンゲルスは、三月革命を通じて、林氏のいうように、「自ら労働者團體の中に入つて行くことはせず、専ら小ブル的民主主義團體の最左翼としてのみ行動した」(前掲論文一四頁)のでなかつた。林氏は事實を全くあやまりつたえている。第二に、エンゲルスが『共產主義的同盟の歴史』のなかでボルンにあたえた酷評について、それをエンゲルスの労働組合論だと曲解している。エンゲルスは労働組合を非難しているのではなく、ボルンの「労働者親睦會」がプロレタリアートを小ブルジョアジーの影響からきりはなす獨立的組織でなかつたこと、のちの表現を用いればプロレタリア政黨を労働組合に解消する見解を、非難しているのである。「この親睦會の公けに發表した文書のなかには……同業組合の思い出と希望、ルイ・ブランやブルードンの思想の斷片や保護關稅主義等がいりみだれている」(エンゲルス『共產主義者同盟の歴史』——マルクス・エンゲルス選集第二卷四

もちろん、マルクス・エンゲルスはここで小ブルジョアの民主黨との提携を否定しているのではない。「革命的労働者黨はその打倒をめざしている分派に對抗して、この小ブルジョアの民主黨と提携する」(前出)のである。プロレタリアートはブルジョアの影響から獨立した獨自の政黨として小ブルジョアの民主黨と提携して、ブルジョア革命を遂行するのである。

革命的鬭争段階

プロレタリアートが暴動のあいだおよびその直後に考慮しなければならない主要な點は二つある。第一には、勝利した小ブルジョア民主黨はかならずプロレタリアートの武装解除を要求してくるであろうが、これに對してプロレタリアートはブルジョア民主主義者の影響を根絶して自らを即時獨立に組織してそれを武装させなければならぬ——「全プロレタリアートの武装が即時實行されなければならない」(『共產黨宣言・共產主義の原理』——國民文庫版一一四頁)。第二には、プロレタリアートは、「新しい公けの政府とならんで……自分たちの革命的労働者諸政府を樹立し、それによつてブルジョアの・民主的政府が、即座に労働者の後楯をうしなうようにするばかりでなく、はじめから労働者の全大衆が背後についている公權の監視と威壓のもとにあることを感じさせなければならぬ」(前掲書一一三—四頁)。

マルクス・エンゲルスは、ここですでに、ロシアの二月革命から十月革命にいたる二重權力のあのレーニン戰術——いわゆる四月テーゼの前提條件を、規定している。

二重權力段階

小ブルジョアの新しい公けの政府と革命的労働者政府の並立する段階を、のちのレーニンの用語にしたがつて、二重権力段階とよぶこととしよう。新政府はあたらしい地歩をかためると、ただちに労働者に對して戦いをいどんでくるであろうが、その場合の戦術をマルクス・エンゲルスは規定している。

まず第一に、「労働者が獨自在クラブに組織され結集されていること」、しかも「運動の根據地に設立された指導部のもとに労働者クラブを結集する」こと、が必要である（前掲書一一五頁）。第二に、當然おこつてくる國民代表機關の選舉については、労働者がこの選舉から除外されないようにしなければならず、また労働者候補を「プロレタリアートの革命的立場と黨の見地とを公衆にしめ」すためにたて、その選出をはからなければならない（前掲書一一五—一一六頁）。民主派が分裂し反動派に勝利の可能性をあたえないかと案じてはならない。

註 ロシアのメンシエヴィキはブルジョアジーが逃げはしないかとおそれたが、マルクス・エンゲルスはまさしく反對のことをいつている。レーニンはマルクス主義の傳統にただしくのつている。

マルクス・エンゲルスは、小ブルジョア民主主義者と労働者とが衝突する問題をあげて、それを、一つはそのままてたびたび述べてきた「單一不可分のドイツ共和國」の問題であり、第二は封建制度の撤廢の問題である、としてゐる。この第二の問題はとくに重要であるから、簡単に紹介しよう。小ブルジョアジーは、フランス大革命が證明しているように、農民に封建的領地を自由財産としてあたえ、かれらを小ブルジョアの農民階級に轉化するが、しかし農業プロレタリアートをそのままにのこすであらう。マルクス・エンゲルスはつぎのように結論している——

「労働者は農業プロレタリアートのため、また彼ら自身のために、こうした計畫に反對しなければならない。彼らは沒收された財産を國有財産として保存し、労働者植民地——運合した農業プロレタリアートが大規模農業のあらゆる利點を發揮しつつ耕作するもので、それによつて共有財産の原則が、動搖するブルジョアの所有關係のただなかで、ただちに強固な基礎を獲得する

——に役だてるように要求しなければならない。民主主義者が農民とむすびついたように、労働者は農業プロレタリアートとむすびつかなければならない」(前掲書一六—七頁、傍點筆者)。

ブルジョア革命を最終の革命とみるブルジョアジーとことなつて、マルクスとエンゲルスのブルジョア革命理論の本領は永續革命論にあつた。かれらにとつては、ブルジョア革命はかれらの終局目標であるプロレタリア革命の歴史的必然の不可缺の前提條件であるかぎり、そしてブルジョア革命がプロレタリア革命にとつての歴史的に必然的な經過點であるかぎり、プロレタリアートはブルジョア革命に實踐的に参加しなければならず、しかも主體的にブルジョア革命をプロレタリア革命に轉化させなければならなかつた。プロレタリアートは「現在の運動のなかにあつて、同時に運動の未來を代表」(前出)しなければならないからであつた。

この永續革命の戰術がこゝでは完成の域に達している。プロレタリアートは小ブルジョア・農民とともにブルジョア革命を、そして農業プロレタリアートとともにプロレタリア革命を貫徹する——しかもプロレタリアートによるブルジョア革命の指導の理論にきわめて接近している。マルクス・エンゲルスはこゝでブルジョア革命期におけるプロレタリアートの小ブルジョアジーからの獨立性を強調しているからである。

エンゲルス『ドイツ農民戰爭』(一八五〇年)

エンゲルスは、三月革命の經驗をドイツの最初のブルジョア革命である一五二五年のドイツ農民戰爭と對比して、整理した。農民戰爭のときから「三百年の年月がすぎさり、そして多くのことがかわつた。しかし農民戰爭はこんにちの吾々の闘争からそうかけはなれていない。たたかうべき敵はいまもなおたいていおなじである。一八四八年

と四九年にいたるところでうらぎつた諸階級と階級分派を、吾々は、すでに一五二五年に、いつそうひくい發展段階においてであるが、やはり裏切者としてみいだすであらう」『ドイツ農民戦争』——國民文庫版二八頁。

エンゲルスはドイツ農民戦争における階級闘争をつぎのように整理している——

「三大陣營の第一、すなわち保守的・カトリック陣營に、現状の維持を利益とするいつさいの要素、それゆゑ帝國權力、聖職諸侯と一部の世俗諸侯、富める貴族、高級聖職者および都市貴族があつまつていたのにたいし、市民的に穩健なルッター的改革の旗のまわりには、反對派中のもてる要素、すなわち下級貴族大衆、市民、さらに教會財産の沒收によつて富むことを期待しこの機會を帝國からのいつその獨立をかちとるために利用しようとした一部の世俗諸侯までもが、あつまつていた。最後に、農民と平民とは、あつまつて革命的黨派をなし、この派の要求と理論とはミューンツァーによつてもつともするどくいいあらわされていた」(前掲書五二頁)。

マルクスは、よくしられているように、一八五九年四月十九日ラッサールの戯曲『フランツ・フォン・ジッキンゲン』を批判したかれの手紙のなかで、エンゲルスのいま書いた定式化をそのまま採用している——

「君自身、君のフランツ・フォン・ジッキンゲンの様に、ある程度まで、ルーテル的『騎士側の反抗を、平民的なミューンツェルの反抗運動以上におくという外交的な誤謬に陥らなかつたらうか』(改造社版マルクス・エンゲルス全集第二二卷一五六頁)。
封建制に對する「市民的に穩健なルッター的改革派」・「ルーテル的『騎士的反抗派』は、あたかも三月革命におけるブルジョアジとひとしく、ブルジョア革命を否定した。ルッターによつて、「神のめぐみによる諸侯制、受身の服従、そして農奴制すら、聖書によつて聖化された。農民一揆だけでなく、ルッター自身がこれまでにない聖俗にたいする反抗すら、こゝてすべて否定された。民衆運動のみならず市民的運動までも、こうして諸侯に賣りわたされた」(『ドイツ農民戦争』——國民文庫版五八頁)。「平民的『ミューンツェルの反抗派』つまりおちぶれた市民

と手工業の職人と日雇職人・ルンペンプロレタリアートなどいまの小ブルジョア層とプロレタリアートとの先祖たち、「平民的」農民的反對派」は、封建制そのものを根底から革命しようとした。全國民の二大陸營への「分裂がごく大ざっぱにしろおこりえたのは、すべての身分から搾取されている國民中の最下層、すなわち農民と平民が蜂起したときだけである」(前掲書四四頁)。

このように、エンゲルスは、さきに述べた三月革命の經驗を整理し、それをドイツ農民戦争のなかで検討して、ブルジョア革命における「ルーテル的」騎士的立場」と「ミューンツェルの」平民的立場」・「平民的」農民的反對派」との對抗關係を析出してきたが、それはさらに『ドイツ農民戦争』の「第二版序文」(一八七〇年)のなかで當時のあたらしい情勢に適用されている。エンゲルスは當時の階級關係をつぎのように分析している——プロレタリアートに恐怖するブルジョアジーは、「どんな値段でも」同盟者に「自分を賣りつけた」が、その同盟者は「軍隊と官僚をしたがえた王權」大封建貴族、田舎貴族、坊主であり(『ドイツ農民戦争』一四頁)、これを要するに「ルーテル的」騎士的立場」である。これに對し、「一生ただ勞働賃金にのみたよつてくらす階級は、ドイツ國民の多數をしめるにはまだ依然としてほど遠い。それゆゑ、彼らは同盟者をもたのみにしなければならぬ。そして、これらは、ただ小市民のあいだ、都市のルンペン・プロレタリアートのあいだ、小農民および農業日傭労働者のあいだでだけでもとめる。」とりわけ、小農民と「多人數のもつとも自然の同盟者」であり社會主義までもにあゆめる農業日傭労働者は都市プロレタリアートの強力な同盟者である(前掲書一五一—一八頁)。これは「平民的」農民的反對派」にはかならない。

こうしてマルクス・エンゲルスは「ルーテル的」騎士的立場」と「ミューンツェルの」平民的立場」・「平民的」

農民の立場」との對抗理論をドイツ農民戦争からも一八七〇年のドイツの階級關係からもひきだしてきた。この對抗理論は、マルクス・エンゲルスにとつて、ブルジョア革命運動全體に通ずる基礎理論であり、だからこそそれはまたレーニンのブルジョア革命理論の精髓である『民主主義革命における二つの戦術』の原型となつたのであり、またレーニンの勞農同盟論の原型となつたのである。

註

レーニンは自ら自分の勞農同盟論をマルクス・エンゲルスの「ミユンツェルの『平民的立場』論にさかのぼらせている。これは一八五九年四月一九日のラッサールあてのマルクスの手紙を引用しながら、「重要なことは、マルクスもエンゲルスもともに『ルッター的』騎士的」(二十世紀はじめのロシア語に直せば自由主義的地主的)反對派を『平民的』ミユンツェルの(同じように直せばプロレタリア的『農民的』)反對派より優先するということを明白な誤りと考えて、社會民主主義者にとつて絶対に不適當なことだとみたといふことである」と指摘している(一九一一年執筆の『選舉闘争の原則的諸問題』——Zur Deutschen Geschichte. I. SS. 283-4 頁)。

四 社會民主黨批判

マルクスとエンゲルスのブルジョア革命理論は、基本的には、二本の足のうえにたつてゐる——一本の足は永續革命論であり、もう一本の足は「ルーテル的『騎士的立場』と『平民的』農民的立場」との對抗論であつた。この二本の足はみごとに統一されて、レーニンのブルジョア革命理論に發展してゆくわけであるが、わたしはレーニンの基礎となつたマルクスとエンゲルスのブルジョア革命理論の二本の足がどのように成長したかを、わたしはこれまであとづけてきた。

つぎに、わたしは、少し方向をかえて、ドイツの社會民主黨がどのようににマルクスとエンゲルスのブルジョア革

命理論をゆがめ、そしてマルクスとエンゲルスがどのようにこの歪曲にたいしてたたかつたか、をあきらかにすることとする。いままで通り簡単に紹介するという方法をとる。

マルクス『ドイツ労働者黨綱領評注』（一八七五年）

當時存在していたドイツの二つの労働者組織——マルクス主義者のリープクネヒトとベーベルが指導した社會民主労働黨（いわゆるアイゼナッハ派）とラッサール主義のドイツ労働總同盟とが、一八七五年ゴータ大會で合同してドイツ社會主義労働黨を組織して、いわゆるゴータ綱領を採用した。このゴータ綱領はまったくラッサール派の影響のもとにつくられ、しかもマルクス主義派のアイゼナッハ派はまったくラッサール派に屈服したので、マルクスはここにかかげた『ドイツ労働者黨綱領評注』をかいて逐條的にこれを批判し、エンゲルスもベーベルとブラッケあての手紙のなかで大綱的にマルクスと同じ批判をしている。マルクスの批判はゴータ綱領を一つ一つ順番に批判しているが、ここではブルジョア革命に関するものだけを紹介しよう。

マルクスは綱領の政治的要求について書いている——

「綱領の政治的要求は、普通選舉權、（人民による）直接立法、人民の司法、民兵制などの、古い言いならわされた民主主義的な冗語よりほかに、なにもふんでいない。」しかし、わすれられた點が一つある。ドイツ労働者黨は『今日の民族國家』したがつて自分の國家であるプロシヤ・ドイツ帝國の内部で活動すると、はつきり宣言しているのだから、黨は主要なことをわすれてはならなかつたのだ。すなわち、それらのすべての美しいがらくたは、いわゆる人民主權の承認をもにしたものであること、したがつてただ民主共和制下においてのみ適切なものであることが、それである」（『労働者黨綱領問題』——國民文庫版五六—七頁）。

民主主義的諸要求をかかげながら民主共和國の要求をすてること——民主主義的諸要求が「軍事的専制主義ではない國家」のもとで合法的手段で實現されると考えること、こうしたラッサール派の考え方は、この綱領のなかで、今日の「國家の補助」をうけて社會問題を解決するという表現で結晶されている。ラッサールとラッサール派は「軍事的専制主義國家」のもとで労働者階級は解放されるというのである（前掲書五三—四頁、七一—二頁）。

さらにこの綱領は、労働者階級「にたいしてその他のすべての階級はただ一つの反動的大衆をなすにすぎない」といつている。この規定はバリ・コンミュニョンのようなプロレタリア革命には通用するかもしれないが、しかしブルジョア革命には通用しない。ブルジョアジーは封建貴族とおなじ反動的階級ではないし、現にこの綱領の民主主義的諸要求の大部分は小ブルジョア民主主義と一致している。ラッサールとラッサール派はブルジョアジーを封建貴族と同一視して攻撃することによって、實際にはユンカーの代表ビスマルクと同盟していた（前掲書四七—四八頁、なお六九頁のエンゲルスの手紙参照）。

この綱領は、盛澤山の民主主義的諸要求、プロレタリア的外貌にもかかわらず、ブルジョア革命もプロレタリア革命をもねぐつてゐる。むしろそれは反革命ビスマルクの援護射撃であつたのである。

註 マルクス・エンゲルスは、さきに述べた一八五九年四月十九日のラッサールあての手紙のなかで、ラッサールを「ルーテル的『騎士側』の立場、ここでいうビスマルク的立場にたつものと非難しているが、エンゲルスは一八六五年の『プロシヤ軍事問題とドイツ労働者黨』のなかで、「資本家の悪口はたえずいうが、封建主義者にたいしてはいかりのことば一ついいない人々」と、暗にラッサールを攻撃している（マルクス・エンゲルス選集第一二卷四六頁、なお五八・六八頁など参照）。ここで紹介したマルクス『ドイツ労働者黨綱領評注』はフッサールとラッサール派に對する最初の公然な體系的批判である。なおラッサールと同じ傾向は眞正社會主義であつて、それははやく『ドイツ・イデオロギー』・『共產黨宣言』三などで徹底的に批判されている。

エンゲルス『一八九一年の社會民主黨綱領草案の批判』（一八九一年）

ドイツ社會民主黨内部におけるマルクス主義派は次第につよくなり、一八九一年のエルフルト大會でさきのゴータ綱領が改訂されることとなつた。エンゲルスはさきの『ドイツ労働者黨綱領評注』を公表するとともに、これからかくいわれる『エルフルト綱領批判』をかいて、そのまちがいをただそうとした。

このエルフルト綱領はながく世界の社會民主黨綱領の模範になつたものであるから、その構成を簡単に紹介することしよう。（全文は『労働者黨綱領問題』國民文庫版一〇七一―一一一頁）。エンゲルスはその構成を三つにわけて一趣意文 『共產黨宣言』の第一章と第二章に相當する。資本主義の發展と資本主義的私的所有の社會主義的生産への轉換の必然性、社會民主黨の終局的任務。ただし「プロレタリアートの獨裁」がぬけてゐる。

政治的要求 『共產黨宣言』の第四章および『ドイツにおける共產黨の要求』の政治的部分。まずここでは政治的要求がブルジョア革命をめざすかプロレタリア革命をめざすか規定されておらず、したがつて實際上ブルジョア革命をめざす政治的要求がプロレタリア革命をめざしているように書かれてゐる。

經濟的要求 『ドイツにおける共產黨の要求』の労働者の要求に相當する部分がくわしく書かれてゐる。ゴータ綱領とひとしくブルジョア革命の本質的部分にあたる農業綱領がなく、その點でも『ドイツにおける共產黨の要求』から決定的に退歩してゐる。エンゲルスは、この綱領の政治的部分、つまりブルジョア革命の政治綱領の決定的あやまりをとくに強調しており、しかもマルクスがゴータ綱領についていつたまさにその同じ點をついてゐるのである。

「このきわどい、だが非常に根本的な諸點というのは、どういうものか？」

「第一の點。もしこの世に、なにか確かなことがあるとすれば、それは、わが黨と労働者階級とが、ただ民主的共和制の形態のものでのみ支配權に到達することができるといふことである。この民主的共和制は、すでにフランス大革命がしめたように、

「プロレタリアートの獨裁のための特有の形態でさへある。」もしこれをいれたため危険がおこるとすれば、「全政治權力を人民代表機關の手に集中せよという要求」でもよい。

「第二の點、ドイツの改編。一方では小邦分立狀態をとりぞかなければならない。……他方では、特有のプロシヤ精神がドイツを重壓することがなくなるように、プロシヤは存在をやめなければならず、いくつかの自治州に解消されなければならない。……私の考えでは、プロレタリアートがつかうことができるのは、單一不可分の共和國の形態だけである」(『労働者黨綱領問題』——國民文庫版九七—九九頁)。

この二つの點は「本來言わねばならないことだが、そこには書かれていない。たとえこれらの一〇條の要求が全部いれられても、……その主要目標そのものはけつして達成されないのであらう」(前掲書九五頁)。ドイツ社會民主黨はこれほどエンゲルスに批判されても、エンゲルスの意見を採用しようとしなかつたし、カウツキーはその『エルフルト綱領解説』(改定文庫)のなかで、この點に言及しようとしなかつた。

ドイツ社會民主黨は、個々の點でマルクス主義的表現をとりながら、プロレタリア革命の基本綱領であるプロレタリアートの獨裁をぬかし、ブルジョア革命を志向する政治的要求を民主共和國の基本要求にむすびつけないで、ブルジョア革命を志向する政治的要求があたかもプロレタリアートの勝利をもたらすようにあざむいているのである。第二インターナショナルの理論には、一般に眞實のブルジョア革命理論がなく、さらにはその基底となる國家理論がない。レーニンをもたないで、第二インターナショナルのひとつがふりまわすマルクス・エンゲルスがまさしくその點で第二インターナショナルの日和見主義を非難しているのである。エンゲルスは、「このようにそのときの目前の利害のために重大な主要觀點をわすれること、このように後日の結果を考慮せずに瞬間の成功をもとめねらうこと、このように運動の現在のために運動の未來を犠牲にすることは、……やはり日和見主義であるし、またつねにそうだらう」(前掲書九七頁)とさとしてゐる。